

## 太秦安養寺村

うずまさあんようじむら

現) 右京区太秦 石垣町・帷子ノ辻町・御所ノ内町・垂箕山町・西野町・皆正寺町) 付近

村域は太秦の西部、帷子ノ辻付近から南にかけてと思われるが、正確な範囲比定は困難。近世を通じて村高は三三五石余であるから、太秦の中では中位の村であった。北は太秦門前、西は生田・高田、南は東梅津、東は太秦中里の各村に接する。

村名は、推古天皇の時代にこの地に建立されたという安養寺に由来。村内御所ノ内の名について、寛永元年(一六二四)の山城国葛野郡安養寺村由緒(呑原家文書)は「近き西に御所のうちと言ふ処あり。此地ハ則秦川勝より四代マヘ四代の後まで九代の間の居城の跡也」と記す。この地には「関白藤原道隆の後胤で太秦殿ともよばれた藤原信清の屋敷もあつたらしく、山城名跡巡行志」は「太秦殿、今云「御所ノ内」、坊門信清公第」と記す。この邸には、建保六年(一一一八)四月四日後鳥羽上皇の御幸があつた(吾妻鏡)。

先引の村由緒によれば、文禄元年(一五九二)には瑞竜寺(現上京区)領であつたという。しかし享保十四年(一七二九)の山城国高八郡村名帳には、村高三三五石八斗六升二合余の全部が有栖川宮領とあり、これは幕末まで変化しない。また、安養寺并二村中法華宗門となりし事ハ太子の薬師御開眼のとき法華経を伝説遊されし因縁にや」(岡村由緒)とあり、村中が法華宗門であつた。庄屋は石田・大藪の両家であつた(太秦村誌)。

明治七年(一八七四)太秦門前・太秦市川・太秦中里各村と合併し太秦村となつた。

現太秦石垣町にある日蓮宗本瑞寺は、慶長二年(一五九七)僧日秀の創建(京都府地誌)。文禄元年壬辰の年村雲の御所御領分成立とき、右御宮瑞竜院殿日秀尊儀今の本瑞寺を御開闢遊されける。」(岡村由緒)と記す。

## 安養寺跡

あんようじ

広隆寺西南の地に、推古天皇の時代に建立された寺。

「広隆寺由来記」に「秦長倉の建立、初め徳願寺といい、嵯峨天皇が安養寺と改めたと記される。一方、寛永元年(一六二四)の山城国葛野郡安養寺村由緒(呑原家文書)は、推古天皇二十四年丙子のとし七月十五日、大唐国新羅国乃大王より御たけ二尺と三尺三寸との薬師如来御尊像二軀を推古天皇(献上仕奉りけれハ、推古天皇太子へ御勅定有て、二尺御尊像ハ広隆寺の御本尊と被成、川勝を広隆寺之檀那と定めさせられ、また三尺三寸の御尊像は太子より川勝へ守り本尊ニ宣ふやうは安養堂は汝の住処に近けれハ今より安養堂ハ汝の持仏堂といたすへしと仰られける、川勝謹て難有く御請申上則大藪乃中に安養堂を建立有て、竹林山安養寺と改、右薬師如来を本尊に安置す、則右薬師守護の号令を定られて日々夜々に眷属二十人を薬師守護の勤番役の仲間と定められは則今の仲間中と言ふハ右勤番役の事なり」と記し、新羅より贈られた薬師如来を本尊とする大堂を秦川勝が建立したとしていゝる。いづれにしても安養寺が推古朝の頃秦氏一族によって建立されたことでは一致する。

安養寺のその後の推移は不明であるが、「山城名勝志」には、村内有小堂一、是古安養寺旧跡云々、今為「法華宗」と記し、小堂として存続していたらしい。幕末・明治初期には瓦葺の間口五間・奥行四間程度の寺で、毎月の八日講には広隆寺の僧侶による説経があり、本尊厨子の鍵は庄屋・年寄が保管した(太秦村誌)。また寺子屋も開かれ、山ノ内村や安井村からも子供が通つた(同書)。明治五年(一八七二)廃寺となつた(京都府地誌)。

帷子ノ辻 現) 右京区太秦帷子ノ辻町

村の西端、生田村との境付近。都名所図会が上嵯峨・下嵯峨・太秦・常盤・広沢・愛宕等の別れ道なり」と記すように、分岐点である。東は太秦、西は下嵯峨に至る下嵯峨街道上で、東北は常盤に、西北は上嵯峨・愛宕に通じる。南側に向かう道がなく、片側のみに分岐するゆえの名ともいわれる。

雍州府志は伝言檀林皇后任遺勅奉野葬一時所著御之帷子残斯処云といひ、檀林皇后嵯峨天皇の皇后橘嘉智子の嵯峨深山谷への葬送の際、棺を覆った帷子の衣が風で落ちた所という伝えがあったらしい。

### 嵯峨野

東は太秦、西は小倉山、北は上嵯峨の山麓、南は大堰川（桂川）を境とする平坦な野。往古は葛野川（現桂川）の溢水による沼沢地で、未墾地が大半を占めていたが、秦一族が川を改修し、粟原堤の完成によって田野の開拓が進み、肥沃な地となった。三代実録元慶六年（八二二）十二月二日条には山城国葛野郡嵯峨野充元不制、今新加禁、樵夫牧豎之外、莫聽放鷹追兔とあり、平安遷都後は禁野とされて、天皇・貴族はここで遊猟し、若菜を摘んで遊楽をした。禁秘抄には堀川院御時、頭己下向嵯峨野誠有逍遙是給虫屋一向選虫奉之とあって虫の音を聞きに訪れている。

嵯峨天皇の嵯峨院（現大覚寺）、後嵯峨上皇の龜山殿（現天竜寺）、檀林皇

後の檀林寺などをはじめ、前中書王兼明親王の山莊おくらどの雄蔵殿や歌人藤原定家の山莊など、貴紳の邸館や大寺が営まれ、文学の舞台ともなった。歌枕でもあり、五代集歌枕「和歌初学抄」六雲御抄「和歌色葉」にあげられる。花見にまかりけるに嵯峨野をやきけるを見てよみ侍りける。賀茂成助

小萩さく秋迄あらば思出でむさが野を焼きし春は其日と（後拾遺集）

法輪寺に詣で待るとして嵯峨野に大納言忠家が墓の侍りける許に罷りてよみ侍りける（権中納言俊忠）

さらでだに露けき嵯峨の野辺に来て昔の跡に萎れぬる哉（新古今集）

悲しきは秋のさが野のきりぎりす猶古郷にねをや鳴くらむ

後徳大寺左大臣（新古今集）

君と我行逢ふ道を世と共に嵯峨野の原も有せてしがな（元輔集）

嵯峨野の見し世にも変りてあらぬやうになりて人いなむとしたりけるを見て（西行 由家集）

此里や嵯峨の御狩の跡ならむ野山も果てあせ変りけり（西行 由家集）

ほかに「古今集」には、

寛平御時蔵人所のをのことも嵯峨野に花見むとてまかりける時帰るとして皆歌よみけるついでによめる（平 貞文）

花にあかで何帰るらむ女郎花多かる野べにねなまし物を

の歌がある。「枕草子」にも「野は嵯峨野、さらなり」と第一にあげられている。「源氏物語」松風の巻では、光源氏が「大覚寺の南にあたりて、滝殿の心ばえなど、劣らず面白き寺」を建立している。「平家物語」の小督の物語、白拍子祇王祇女の物語など、嵯峨野を舞台とするものは多い。

近世に入ると人家も増え、延宝六年（一六七八）の「出来齋京土産」には京都の西二里ばかりにして、北さが南さがあり、民家立ちならびにぎはい

て、人ながらも賤からず」とある。

## 有栖川

ありすがわ

齋川いっせきとも称され、有巢河とも記す。大覚寺の北、観空寺谷奥からの溪流と広沢池から流れ出る水源が、下嵯峨村の北の安堵橋西で合流、嵯峨野を南流して高田・東梅津村を経て桂川に注ぐ。

「徒然草」第一・二四段にも「今出川のおほい殿、嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに、水の流れたる所にて」とみえる。ただし、古くより知られていた有栖川は、顕昭の「袖中抄」が、ありす河は齋院のおはします本院のかたはらに侍る小河也」というように、賀茂の齋院御所付近の小川のほうで、歌枕である「北区↓有栖川」。近世の「由州名跡志」も「案同名河在賀茂、紫野、嵯峨三所」と記す。しかし、伊勢齋宮の野宮の設けられた嵯峨野を流れる有栖川であるため、混同されることもあったのではなからうか。また、有栖は荒櫟・荒瀬の意味で、嵐山が古く荒櫟山といわれ、大堰川（桂川）が元来荒櫟川であったともいわれる。

江戸時代は灌漑用水として重要視され用水掛りの上嵯峨村のうち池裏村と下嵯峨・生田の三方村の分水争論などもあった（生田村）。

## 千代の古道

ちよ ふるみち

常盤村常盤の森を過ぎて、広沢池の東南に出る細道で、都から嵯峨院（現大覚寺）に通ずる小道という。黒川道祐の「嵯峨行程」には、鳴滝ヲ西へ出テ（中略）後宇多帝ノ陵ノ跡残レリ、（中略）石不動ヲ安置ス、此ノ辺ヨリ、

西へ広沢ノ池ノ南へ出ルヲ、千代ノ古道ト云」とある。「雍州府志」は「在二帯取池西南一、是則自レ京所レ赴二上嵯峨一而是道称二上道一傍レ北所レ行也」とその道筋を記す。

千代ノ古道の名は「後撰集」の次の歌にみえる。

さがの山みゆき絶にし芹川の千代のふる道跡はありけり 在原行平

以後、嵯峨山（歌枕）とともに数多くの歌に詠まれる（嵯峨山）が、この芹川が元来は元伏見区の芹川であることから（下芹川）、千代ノ古道トハ比喩ノ詞也、元来其所在ニハ非ルナリ、但、皆嵯峨野ニ千代ノ布留道ヲ詠ハ因二件歌一後人作意也」（由州名跡志）と、嵯峨の千代の古道を否定する説もある。

元来は、歌の上のことばであったものが、近世に入って、現実の道に特定されたものであろうか。

## 罫原堤

かしばらつみ

下嵯峨村の南端から大堰川（桂川）の東に沿って南北に通じ、松尾橋の東詰に至る約一キロの堤防。

大堰川の治水は、六世紀の頃この地を根拠地とした秦氏一族によってなされ、それまで葛野川とよばれていたが、造葛野大堰、於天下誰有此檢、是秦氏率催種類、所造構之」（政事要略）所引秦氏本系帳）と大堰の完成によって名称が変えられたが、罫原堤もその折りにできたといわれる。

ただ罫原の名は「雍州府志」に「古斯辺船橋清家之所レ領也、今庶流有二伏原称号一、則斯申也」と記される。なお同書が、この堤の東南に野寺があり、下嵯峨土人之墓」であったと記す。

生田村 おいたむら

現) 右京区嵯峨野 秋街道町 有栖川町・神ノ木町・嵯峨ノ段町・

清水町・開町・宮ノ元町)

北は上嵯峨、西は有栖川を境に下嵯峨、南は高田、東は大秦門前・大秦安養寺の各村に接する純農村。古くは葛野郡高田郷(和名抄)の地と思われる。

村名は齋宮神社の馬場の松並木の小枝が風にゆれる有様から小枝村をえだといつたものが転訛したと伝える(太秦村誌)。

享保五年(一七二〇)の村明細帳に、古検高は二三四石五斗三升四合、うち天竜寺領一八〇石五斗九合、阿野家領九石三斗五升五合、八幡公文領二石三斗、残り四二石三斗七升が代官所支配で、この石高は幕末まで変化はない。家数は高持十六軒、水呑六軒、人口は男五四人、女六〇人の計一二四人、それに牛一二匹とある。当村は元禄八年(一六九五)から伏見町(現伏見区)の大助郷役を務めてきたが、訴訟の結果、宝永六年(一七〇九)に御免となった。その後は琉球人の参向や帰国、あるいは朝鮮人來日及び紀州候の江戸下向などの際に、伏見から守山(現滋賀県守山市)までの人高御用と不時の御用は勤仕することになった(村明細帳)。

当村内には二条通・三条通(下嵯峨道)・愛宕道の大通が走り、京の町との生活上の関連も深かった。山林・藪地がなく、田畑が相半ばし、大豆・粟種・蘿蔔(大根)・美綿など米以外の作物も栽培。農閑期には男は京都へこゑを買取ニ参ル、且又、当村ニ柴刈場無御座、三里四里程も有ル他領之山へ柴ヲ買取ニ参ル、女は朝夕之なそうじ拵、或ハ木綿糸ノ布糸なとうむ、手おり仕り、男女之きる物ヲいたし候(様子書)とある。

大堰川(桂川)の川筋から離れ、川床より低地であったこの辺りは、大堰川の二ノ井関からの小川の用水のほかは、もっぱら有栖川が利用されたが、早魃期の農業用水のためには、広沢池に用水溝が三筋設けられ、下流諸村の

水田を潤した。これら用水溝の伏樋補修費の負担が常に池裏(土嵯峨)・川端(下嵯峨)・生田の三村の間で問題となり、分水を含めて用水の利用は村人の深い関心事であった。

享保一〇年には、井溝を六つに分けながら、分水木がなかったことから高ニ応シ而ハ水当りすくなく参候而、当村領ニハ別而迷惑仕候間、何とぞ当春、右所ニ分出木ヲ御定置被為成被下候ハハ難有可奉在候、尤右三ヶ村ト相談仕銘、御地頭様方へ茂右之通御願可申上旨ニ御座候」と京都代官玉虫左兵衛に出願している。享保一八年には池浚えについて大池之儀ニ御座候候得者、右坪数程、今年より五ヶ年之間、毎年御扶持方ニ而役仰付被下候者、土砂不残さらへ上御田地干損不仕」と京都代官小堀仁右衛門に願出ている。広沢池から引く伏樋についての記録は、正徳三年(一七二三)の仕替から天保七年(一八三六)の普請諸入用帳まで残る(海老名家文書)。

宝暦五年(一七五五)の六齋支配村方控牒(干菜寺文書)によると、当時六齋念仏の行われていた講の一つに「生田村講中」があり、現在も嵯峨野六齋の名で伝承される。八月盆に旧地区を棚経を唱じて回るほか、八月二三日に阿弥陀寺で奉納する。村内の海老名家(嵯峨野神ノ木町)には承応三年(一六五四)から明治三〇年(一八九七)までの古文書を所蔵。由緒書によると、当家は暦応二年(一三三九)、天竜寺建立に参与するため、長州萩から京に上り、天竜寺武士となって代々海老名家右衛門何某と名乗った。のち文禄年代(一五九二-九六)に生田村庄屋・大庄屋として当村に定住したという。屋敷内に、是より西天竜寺領、文禄二年巳二月、庄屋藤右衛門」と刻んだ境界石が現存する。

齋宮神社 現) 右京区嵯峨野宮ノ元町

下嵯峨街道(三条通)に南面する小社で、神明社ともいう。祭神は天照大神で、創立年代は不詳。無格社で例祭は一〇月一七日。

山城名跡巡行志」に「葉抄云く、伊勢齋宮野宮在嵯峨野有栖河一云云、是所歟」とあり、伊勢神宮に奉仕する皇女 齋王一が有栖川の近くに野宮を建てて潔斎した旧跡と伝える。当社は寛文中一六六一〜七三に社殿が破損したが、同九年に讃岐住教印坊という者が修復。以前は野宮として巡検使が毎年来たが、村人の負担が大きいため庄屋海老名九左衛門が先頭に立って野宮二非ズと認めさせ、村内では神明社と称し例祭を五月二三日と定めた。嘉永元年一八四八にも社殿を再度修復するが、明治二六年一八九三には村人の中山平左衛門が社地を寄付して、例祭も伊勢と同じ一〇月一七日に復することになった太秦村誌。

当社は殊に婦女子の血の道の守護神として崇敬され、毎年五月初卯の日に大堰川現桂川に祭船を浮かべて恵方祭が行われている。また、推定五〇〇年という神木の椋の大木が下嵯峨街道に二本あり、社地の古さを物語っていたが、交通量の激増により伐木された。

### 阿弥陀寺 現 右京区嵯峨野宮ノ元町

村の南西隅、有栖川東岸に位置し、浄土宗。如意山神通院と号し本尊阿弥陀如来。伝誉上人を開山とし、最近の解体修理により建物は正徳三年一七二三の建立であることが明らかとなった。喚鐘にも正徳三年の銘がある。寺伝によると、栗生野光明寺現長岡京市や智恩院現東山区の僧侶が隠居して住持となったといひ、当寺所蔵の御禱故実書によれば、村人が祈禱した模様が次のように記される。

従二往古一例年正月十三日正午、上剋御祈禱ト称スルヲ略シテ御禱ト唱へ

齋宮神社  
神明ノ社ト地藏菩薩へ洗米御酒ヲ供へ、神明社へ拝礼シ、地藏菩薩ノ尊前

ニ大木居へ、村中向ヒ合ニ座シ、長サ一尺八寸ノ生木ヲ以テ五穀成長繁栄ノ形ヲ成シ、天下泰平五穀成就、村中繁栄家内和合ト唱ルヲ略シテ、榮和

ト唱へ、榮和ト唱ル声ト生木ヲ持テ大木ヲ鳴ス音ト、心経百卷誦読スル声ト、スズヲフリナラス音ト師壇和シテ信心ヲ發シ、声ト音トヲ發シ、天地ニ響シ、抽ニ丹精一奉ニ祈禱一、洗米御酒牛王礼ヲ謹可レ致ニ頂戴一也  
貞亨五戊辰正月十三日 伝誉在判

当寺には高さ七、八〇センチの木像の地藏尊があり、これが以前の本尊とされ、鎌倉期と推定されている。また、江戸前期の東山天皇の姫二宮の懷妊につき、当寺で安産祈念が行われたことから御料五〇石の寄進があったが辞退した。その代りに菊御紋の高張提灯一〇張が下賜された。地藏尊の厨子扉に菊の紋章があるのは、その由による太秦村誌。

### 高田村 現 右京区嵯峨野 内田町・北野町・芝野町・高田町・

千代ノ道町・投淵町・西ノ藤町・東田町・南浦町・六反田町

北は生田村、西は下嵯峨村ふじはら字萩原の桂川堤防に、南は東梅津村・西梅津村、

東は太秦安養寺村に接し、中央を西北から南東に有栖川が貫流する純農村。

地名は「日本書記」にもみえる高田首おびとが部民を統率してこの地に住んだのが起りといひ太秦村誌。高田首は「新撰氏姓録」の右京諸藩下に「高田首、同国人多高子使高野王まか後也」と記している。

和名抄」には葛野郡高田郷があり、郷域は判然としないが「太秦村誌」は南接の梅津村を含む地域と推定している。当村は高田郷の中心で、郷名が村名となったと考えられる。

また、「三代実録」貞観元年八五九正月一〇日条に「正三位行権中納言平朝臣高棟奏請、別墅在二山城国葛野郡一、以為二道場一、賜額曰二平等寺一、詔許之」とみえる平等寺は、当村北東、字上街道 現嵯峨野千代ノ道

町)にその跡がある。高棟は桓武天皇の孫で、天長二年(八二五)に平の姓をうけた。宮廷貴族の別荘地として早くより開けた土地でもあったらしい。

中世には、双ヶ丘麓にあった蓮華心院(八条女院常盤殿)領であった。昭慶門院御領目録(竹内文平氏所蔵文庫)に蓮華心院領として山城国高田寺戸がある。山城名勝志」は元弘三年(三三三三)七月二二日付の、阿具里阿

弥陀仏が高田の道祖神前(さいのかみ)の私領田地を有巢河大夫源増に譲与した譲状を載せる。この譲状の証人に「当庄下司物部」とあるが、鎌倉末期には高田の地は莊園となっていたらしい。建武五年(三三三八)四月付の長福寺文書に妙法院御門跡領山城国高田莊」とみえる。

享保一四年(二七二九)の山城国高八郡村名帳による村高は二八一石六斗一升余で、内訳は正親町家領一五〇石、烏丸家領七四石、高倉家領五〇石、二尊院領七石六斗一升余。慶応四年(一八六八)の山城国高八郡石高割付帳では天竜寺領(七石九斗八升二合)が新たに加わり、村高も二八九石一斗九升六合に増加(井上与四男家文書)。

当村を貫流する灌漑用水路有栖川については井堰改修や分水に関し、上流の生田村・下嵯峨村との間に争論が繰返された(海老名家文書)。桂川の洪水にも度々遭遇。特に慶応二年五月二五日の洪水では萩原堤防が決壊して土砂が流入し、全村浸水という大被害があり、地頭から二〇両の見舞金があった(太秦村誌)。農閑期には牛車をひいて嵯峨へ行き、割木などを積んで江州大津まで行き、帰りに尿尿をとってくる駄賃稼ぎが盛んであった。また藁は換金し桂川辺の茨を採取して燃料とし、綿花(養蚕も自給用の栽培程度で、特別な産物はない(太秦村誌))。

村の中心は字内街道(現嵯峨野高田町)で、高福寺・玉伝寺・福田寺・三ノ宮があった。明治初年、三寺とも浄土宗のため福田寺に合併。三ノ宮は道

祖宮(のみや)の転訛という説もあるが、明治六年(一八七三)松尾社(現西京区)に合祀。

明治七年生田村と合併して嵯峨野村となった。当時の戸数三三三戸(京都府地誌)。

千代の道古墳(現嵯峨野千代ノ道町)は、墳丘径二六メートル、高さ二・五メートルの円墳。墳丘はほぼ完存するが、未調査のため内部構造は不明。古墳後期の群集墳中の一基とみられ、周辺には、かつて多くの小円墳が点在していたと思われる。